

結社誌を訪ねて

安田 青葉

送り舟海へ北辰したたれり

淵脇 護

「河鹿」十一月号

「送り舟」は、盆に帰ってきた精霊をあの世へ送り帰す精霊船のことである。この作品では「海へ」と言っている。従って、真菰で編んだ舟に盆の供物を載せて川へ流すのではなく、蠟燭を点して豪華に仕立てた精霊舟を海へ送り出したものと思われる。その海を行く船に「北辰」つまり北極星が滴るように輝いているというのだから、実に雄大な景である。そこには無事に帰ってくれとの想いが窺える。確かな情景描写から作者の精霊へ籠められた心情が伝わってくる。

少年にあをき 唾蟬 日本海

石 寒太

「炎環」十一月号

「唾蟬」は発音器を持たない雌の蟬のことであり、つまり鳴かない蟬である。少年にその鳴かない蟬、それも青い鳴かない蟬が寄り添ってくれている。もしかしたら少年が唯一心を許している相手なのかも知れない。そして、日本海との取り合せが少年の孤独を尚更大きく感じさせているのである。少年と唾蟬と日本海それぞれに何の因果関係もない。しかし、ないからこそ詩情が生まれてくるのであろう。

月の蝕その夜をうつらうつらとす

村上喜代子

「いには」十一月号

「月蝕」自体はいつの時期にも起こるので季語にはならない。しかし、月の傍題となっている「月の蝕」は秋の季語となっている。今年九月に起きた月蝕の時に詠まれたようだ。歳時記の例句には見られないので、この作品が残る句となるか、作者も楽しみにされているようである。私は、「月の蝕」の夜に「うつらうつらとす」というのは、どこか心許ない様子が響き合っていて、とても惹かれた作品である。

龍太碑に水の 一文字 秋の雲

井上 康明

「郭公」十一月号

飯田龍太の句碑を調べてみた。いくつかある中に「水澄みて四方に閑ある甲斐の国 龍太」があり、「水の一文字」はこの句碑からのもではないだろうか。句碑の作品は、龍太の愛する甲斐の国を堂々と詠みあげた風土詠である。そこから康明氏は秋の季語「水澄む」水に注目し、自身も「秋の雲」を取り合わせて作品として詠みあげた。これらの秋の「水」の流れに、龍太、直人、康明の師系に爽やかな風土の流れを感じる。

おほぞらへひらいて沈む 投網かな

林 誠司

「海光」冬号

「投網」は夏の季語「川狩」の傍題にある。一度に大量の魚を採る方法の一つのようだ。その情景を見たことのない私でも、一句一章で描かれたこの投網の様子が良く分かる。「おほぞらへひらいて」のひらがな表記も効果を發揮しているように思う。スロームーションのように大空にさっと広がった投網が水面にふわりと沈んでゆく映像がよく見えてくるようだ。気持ちの良い作品と

なっている。

跼むとは人おもふこと 思草

松岡 隆子
「葉」十月号

「思草」はナンバンギセルの古名である。物思いに沈んだように横向きに咲くことから、古くオモイグサと言われ万葉集にも詠まれている。「跼む」は腰や足をまげて低くなる姿勢をとることである。色々な場面で屈むことはあるが、対象に近づきたいという思いからとる姿勢だろう。この作品では、屈んで花などを手向け、祈りを捧げているところではないだろうか。「人おもふこと」の措辞からそのように思わされるのである。

昼寝覚めここに至りし記憶追ふ

中西 夕紀
「都市」十月号

昼寝から覚めた時に誰もが一度は経験していることではないだろうか。「私、寝てたの？」から始まり、「今何時？此処はどこ？」と頭が回転し始めて、寝ていた前の記憶を慌てて呼び戻そうとする。「ここに至りし」の措辞が、たかが昼寝ではあるけれど、どこか畏まっていた可笑しみを誘っている。思うに作者は、日々の仕事に追われていらっしやるのではないだろうか。ふっと肩の力が抜けるような作品に出会えた。

あまたれの音やはらかし新茶汲む

川上 良子
「花野」二十一号

雨垂れの音を柔らかいと感じられる作者、新茶の香りも相まってまさに至福の時を過ごされているに違いない。例えば、書齋の机に向かっていて窓の外に雨雲が時を刻むように落ちていく景などではないだろうか。ふと「雨垂れ石を穿つ」のことがわ

成果をもたらすという。何かにつこつと懸命に打ち込んでいる時、癒してくれるのには、新茶は実に相応しいだろう。

うつた姫袖ひとふりに絵馬鳴りぬ

伊藤 環子
「ひいらぎ」十一月号

「うつた姫」は、四季の守護神の冬の女神である。因みに春は佐保姫、秋は竜田姫、夏はつづ姫（つづ姫は季語にはなっていないようだが）といらっしやる。佐保姫でも竜田姫でも、その袖をひとふりしたところで絵馬が鳴るまではいかないように思うのだが、いかがだろうか。つまり、新年や受験を控えての冬場は絵馬が普段より夥しく重なっているのである。それらを鳴らせるのは、この作品のように乾いて強い空つ風を吹かすことができるうつた姫に違いない。季節感を洒落て表現された作品と思う。

自販機のすべて売切れ広島忌

藤井 稜雨
「風の道」十一月号

振り返って、今年の夏は長い猛暑であった。熱中症予防のため常に水分補給の飲み物を持ち歩くことは常識となっていた。仮に持ち合わせていなくても、日本には幸い各所に自動販売機が設置されているので、助かった：という経験も多いのではないだろうか。ところが稀に、自販機に「売切売切：」と全て赤字になっているような時があった。きっと補充が間に合わなかったのだろう。さてこの作品では売切れとなっている自販機と広島忌との取り合せである。好き嫌いの分かれるところもあるかと思う。ただ、現代の水の必要性を暗に述べながら、戦争を犯した過去の事実を忘れずに平和を希求するという思いの伝わってくる作品であると思った。

（筆者住所〒165-0035 中野区白鷺三一五一―一六―四〇三）